

教えることだ、などとは言わないで欲しい。コンピュータを使う明確な目的もなく情報処理教育に参加する学生に、最初からプログラミング等を教え、コンピュータとは難しいものという印象を与えるようなことは間違ってもやって欲しくない。このような教育が必要などころは、学部の専門基礎教育として別個の授業でやって欲しい。

電子メールの使い方にしても、TELNETなどのようなインターネットにのるまでいくつかの難解な命令をキーボードから入力しなければならぬような面倒なものは使わず、私が使っているEUDORAのような簡便なメールソフトの使い方を教え、その設定を総合情報処理センターに手助けして欲しい。マウスを一回クリックするだけでもインターネットの世界というような環境整備と教育が必要である。

また、いかに有用な情報教育がなされたとしても、それを受講した学生が自由に情報機器が使える環境になれば知識は宝の持ち腐れとなり、やがて興味を失い、知識も薄れることになる。情報教育を実のあるものにするには、キャンパスの所々に学生が自由に使える情報機器を設置し、その利用を促す必要がある。

ネットワークを通じて学生が自由に情報をやり取りできる情報端末ボックスなるものが、電話ボックスより広島大学には多いと言われるようになればよい。これも無線化が進み、五年後にはもう古いと言われるようになるかもしれないが……

## おわりに

広島大学の情報化が誰のためのものである

べきか、という問いには、迷わず私のような不精者のためであるべきであると声を大にして使いたい。間違っても、多くの構成員にとって使にくい、役に立たない情報化になつてはならないのである。

あなたが利用するとせざるに関わらず、情報化の費用は負担することになるのだから。  
(なかた・たかし)

## 脚

TELNET 他 パソコンなどを利用するためのソフトウェア

EUDORA 「マッキントッシュ」の上で動く電子メールのソフトウェア

インターネット 一九七〇年代半ばに、米国防総省の高等研究計画局は、研究者同士のコミュニケーションを円滑にするためにネットワークが必要であることを認識し、米国内の大学を中心にネットワーク化が図られた。やがて世界中に広がり地球を覆う巨大なネットワークに成長した。これがインターネットである。

いわばネットワークを数珠状につないだものといえる。

WWW (World Wide Web) ネットワーク上に離散するさまざまな情報を、誰もがアクセスできる情報として公開するためのメカニズム。スイスにあるCERN (European Laboratory for Particle Physics) が始めたものであるが、あつというまに世界中に広まった。インターネット上にクモの巣を張るように情報のリンクが張り巡らされるため、この名前が付けられた。

## 総合情報処理センター

## 最近のネットワーク利用について思うこと

西村 浩 二

## はじめに

ここ半年か一年くらいの間に随分とインターネットという言葉が新聞や雑誌を賑わせ、世間にも馴染んできたこともあつてだろうか? 「今回の特集は広島大学の情報化についてだから、君が書きなさい」と、総合情報処理センターにいるという理由だけで筆を執らされるはめになった。



事実、総合情報処理センターは、本学でもその世界における最先端の場所にあると言つても過言ではないだろう(そのすばらしい環境に置かれている自分に気がついて鳥肌が立つこともある)。が、それゆえに現在のインターネットにおける問題が、単に技術的なことだけに収まらなくなってきたことを感ぜずにはいられないのである。

そこで、現在HINET (Hiroshima university Information Network system) 広島大学情報ネットワークシステム) という小さなネットワークで起こっている問題と、巨大に発達したインターネット上で実際に起こっている問題をいくつか取り上げる。もちろんこの場で結論が出るはずもないが、現在の、また今後の本学における情報化への取り組みに何らかの形で残せるよう、読者のみな

さんにも考えていただきたい。  
**あなたは誰?どこの人?**

一昨年に整備されたHINETも、一年の運用期間を経て、ようやく多くの方々に使われるネットワークに成長してきた。総合情報処理センターにあるユーザエントリマシンにおける六月の電子メール配送量は五九〇〇〇通にのぼり、過去最高の記録を更新し続けている。一方、電子ニュースも一日に二〇〇〇件を超えるアクセスが記録されている。

また最近では、文学部をはじめいくつかの学部生を対象として情報処理教育も行われるようになってきた。

こういった現象は、ネットワークの管理・普及に努めている者としては非常にうれしいことではあるが、一方で心配なことも多くなってきた。それは「彼(彼女)らを外のネットワークに出して大丈夫だろうか?」ということである。

私がネットワーク(というよりむしろワイヤレスステーション)に初めて触れた頃、先輩からはとにかく気をつけて慎重に使うことを教え込まれた。その頃のワイヤレスステーションは、今から見れば遅く、ちよつとしたことでシステムが停止することもあつたため、「他の人と一緒に使っている」という意識を常に頭に置いておく必要があつた。

今でこそシステムの信頼性は向上し、誰もが我が者顔で使つても少々なことでは停止することもなくなつたが、ネットワークの使い方に関しては、昔も今もさほど変わりが無いように思える。

ここでの一番の問題は、ネットワークにおける利用者のマナーである。メールを使い始めた頃は個人対個人の情報のやり取りが中心

であるため、送る方も受け取る方もほとんど第三者を意識する必要はない。しかし、ニュースに投稿を始め、WWWで情報発信を始めるのとたんに第三者を意識せざるを得なくなる。一般に、ネットワークは匿名性の高い世界であると言われる。この匿名性(名乗ったとしても直接顔を合わせなくて済むというのも含まれるだろう)に守られて、ネットワークの利用者は、容易に知らない人に話しかけられる反面、利用者の、乱暴で無責任かつ不快な行動を助長する傾向もある。

実際、学内に限定したニュース記事の中にも、乱暴な記述が見られることがある。その多くが、どこの誰が書いたのかわからない無記名の記事である。私はまだ見かけたことはないが、他人を誹謗・中傷する記事が出てくるのも時間の問題だろう。

こういった記事は完全になくなることはないだろうが、防止する努力は続ける必要がある。日頃からよく言うことだが、電子メールのシグネチャ(署名)は、その防止に一役も二役も買っていると思う。シグネチャが付くことで信ぴょう性が高まり、名乗る本人にとっても自覚が高まるであろう。

情報処理教育で使い方を教えるのももちろん大事だが、それだけで学生をネットワークに放り出すのではなく、「ネットワーク社会での暮らし方」をしっかりと教えておく必要はないだろうか？

### ネットワークの社会現象

ネットワークの魅力に取りつかれ、一日の大半をネットワークのアクセスに費やす人も少なくないだろう。かくいう私も(好むと好まないに関わらず)、メールの読み書き、システムの管理、研究・開発のため、一日の

大半をネットワーク利用に捧げている。

このように、ネットワークに暮らす人は世界中にもたくさんいるらしく、まさに社会の縮図ともいえるコミュニティを形成している。みなさんは、MUD (Multi-User Dungeon) という言葉を聞いたことはあるだろうか？

MUDは、もともとマルチユーザのゲームとしてイギリスで開発されたものであるが、現在ではテキスト型の仮想現実システムに発展している。このようなシステムが北米・欧州で五百以上稼働しており、その上では、複数の人格を持ち匿名で行うコミュニケーション、レイプ・窃盗・殺人などの仮想犯罪、現実世界でほとんど生活せずMUDに没頭するMUD中毒など、これからのコンピュータネットワーク時代で起こるであろうさまざまな社会現象や問題が起こっている。

このように書くこと、悪いことばかりのようにだが、内部では、このような問題に対応するためのネットワーク社会での政治や経済のあ



りかたについての議論なども行われている。

ネットワークは、あまりに急速に発達したため、(現実社会における)法の整備が間に合わず、いわゆる無法状態にあるといっているであろう。にもかかわらず、ネットワークを崩壊させる事態に陥っていない理由は何であるだろうか？

私は、これこそが利用者のマナーによるものであると考えている。かつてネットワークとは、一部の研究者たちだけのものではあった。そのため、ネットワーク利用に関する考え方にも比較的統一されたものがあつた。しかし、ネットワークの普及によって一般の手の届くところまで身近なものになってきた今、いかに利用者意識を一定レベルに保つかが問われているのである。

### おわりに

思いついたことをつらつらと書き並べてみたが、要は、ネットワークは単なるコミュニケーションの道具に過ぎないということである。インターネットがトレンドである今、一部の雑誌にはあたかもネットワークは万能であるかのように書かれているが、電話が手紙にとつて変わらなかつたように、メールが電話や手紙にとつて変わることもないのである。我々は、それぞれの長所を生かしつつ、短所を補いながら、上手にネットワークを利用していかなければならない。

また本学は、全国でも数少ない総合大学である。今後行われる情報処理教育においては、単に手段を追求するだけではなく、さまざまな分野からとらえたネットワーク利用における問題点についても、幅広く取り上げていたきたいと思う。

### プロフィール

- (にしむら こうじ)
- ◆一九九一年、広島大学大学院工学研究科博士課程前期修了
- ◆同年全日空システム企画㈱に入社し、運航業務員(パイロット)の乗務スケジュール作成支援システムの構築、運用に従事する
- ◆一九九四年、広島大学総合情報処理センター助手に任用され現在に至る
- ◆学生時代の専門は「ニューラルネットワーク」であったが、現在は「超高速ネットワークにおける経路制御、通信プロトコルおよびアプリケーションの開発」に興味を持つ
- ◆来年度本学に導入予定のATMネットワークに大いなる期待と(うまく運用できるかどうか)不安を持つ者のひとり

### 懸賞論文募集

経済学部では、広島大学の統合移転完了を記念する事業の一環として、左記の要領で懸賞論文を募集します。ふるって応募ください。

- 一 論文テーマ 「21世紀の経済と社会」または「21世紀の世界経済における日本の役割」に関連した論文
- 二 応募資格 特に制限なし
- 三 応募方法 A4判四百字詰め原簿用紙15枚程度但し、日本語で書かれた未発表の論文に限る
- 四 募集期間 平成七年十月十六日(月)まで(当日消印有効)
- 五 発表・表彰 平成七年十月審査結果発表、十一月九日(木)表彰式
- 入賞者には賞状と賞金を授与(賞金総額30万円)
- 応募者全員に記念品を贈呈
- 六 応募及び問い合わせ先 広島大学経済学部
- 電話(〇八二四)二四一七二〇五
- FAX(〇八二四)二四一七二二